

# 『正法眼蔵聞書抄』口語訳の試み

— 転法輪 —

伊藤 秀憲

## 正法眼蔵第六十七 転法輪

第一段

先師天童古仏、上堂<sup>シテ</sup>、世尊道<sup>ク</sup>、一人発<sup>シテ</sup>真帰<sup>ラ</sup>源<sup>ニ</sup>、十方虚空、悉皆消殞<sup>ス</sup>。師拈<sup>ジテ</sup>云、既是世尊所説<sup>ナリ</sup>、未<sup>ダ</sup>免<sup>レ</sup>尽<sup>ク</sup>作<sup>ス</sup>奇特<sup>ノ</sup>商量<sup>ヲ</sup>。天童則<sup>ハ</sup>不<sup>ラ</sup>然<sup>ラ</sup>、一人発<sup>シテ</sup>真帰<sup>ラ</sup>源<sup>ニ</sup>、乞兒打<sup>ツ</sup>破<sup>ス</sup>飯碗<sup>ヲ</sup>。<sup>(1)</sup>  
五祖山法演和尚道<sup>ク</sup>、一人発<sup>シテ</sup>真帰<sup>ラ</sup>源<sup>ニ</sup>、十方虚空、築著<sup>ス</sup>。仏性法泰和尚道<sup>ク</sup>、一人発<sup>シテ</sup>真帰<sup>ラ</sup>源<sup>ニ</sup>、十方虚空、只是<sup>ダ</sup>十方虚空。<sup>(2)</sup>夾山圓悟禪師克勤和尚云、一人発<sup>シテ</sup>真帰<sup>ラ</sup>源<sup>ニ</sup>、十方虚空、錦上添<sup>ニ</sup>華<sup>ヲ</sup>。<sup>(3)</sup>大仏道、一人発<sup>シテ</sup>真帰<sup>ラ</sup>源<sup>ニ</sup>、十方虚空、発<sup>ス</sup>真帰<sup>ラ</sup>源<sup>ニ</sup>。<sup>(4)</sup>

へ先師天童古仏、上堂し挙す、世尊道く、一人、真を發して源に帰すれば、十方虚空、悉く皆消殞す。師、拈じて云く、既  
に是れ世尊の所説なり、未だ免れず、尽く奇特の商量を作すことを。天童は則ち然らず、一人、真を發して源に帰すれば、  
乞兒、飯碗を打破す。

五祖山の法演和尚道く、一人、真を發して源に帰すれば、十方虚空、築著<sup>ちくじやく</sup>。仏性法泰和尚道く、一人、真を發し  
て源に帰すれば、十方虚空、只だ是れ十方虚空。夾山圓悟禪師克勤和尚云く、一人、真を發して源に帰すれば、十方虚空、  
錦上に華を添う。大仏道く、一人、真を發して源に帰すれば、十方虚空、発<sup>はつ</sup>真帰<sup>しんき</sup>源<sup>げん</sup>。

いま挙するところの、一人発真帰源、十方虚空、悉皆消殞は、首楞嚴經のなかの道なり。

今ノ世尊道ノ一人発真帰源十方虚空悉皆消殞ハ、如レ文、首楞嚴経ノ道ナリ、是(二三九b)ヲ天童上堂ノ時被レ拳歎、天童ノ御詞ニ天童ハ不然トアレハ、仏言ニハ違シテ、アラヌ儀ノ出コムスルカト覺タリ、非レ爾、仏言ノ理ノヒ、ク所ヲ如レ此被レ拳、世尊道ノ一人発真帰源十方虚空悉皆消殞ノ御詞ハ、一仏成仏道歎觀見法界、草木国土悉皆成仏ト云詞ニ聊モ不レ可レ違ナリ、消殞トアル詞モ、キヘヲツルナムト云ヘハアシク成タルヤウニ聞ユ、以ニ悉皆成仏姿ニ消殞ストモ云、又乞兒打破飯碗トハ、乞兒トハ乞食、不可説物歎、カタイトモ云歎、返、イヤシカルヘキ姿、其カ(二四〇a)飯碗トハ飯入ル、器物歎、其ヲ打破シタラム、実弥イヨクシタノム無ニ憑カタ上方ニヤウニ聞エタリ、然而非ニ嫌詞歎、所詮打破飯碗ハ解脱ノ理ナルヘシ、此祖師等面々被レ拳詞共、無ニ御釈ニ上ハ、無ニ左右ニ雖ウイニトモ難ニ治カタシ定、以ニ先々沙汰サダツ図ニ大概加カ了見、定無ニ殊コトナル子細ニ歎、今乞兒非レ可レ嫌ニ卑ヒ賤、只仏祖トイハムニ不レ可レ違、所詮今解脱ノ理ヲ被レ述上ハ、今更不レ可レ及ニ徳失取捨6之条勿論事、

築著碯著ノ詞、是又非レ無レ謂、一人発真帰源ノ道理、十方虚空ニ築著碯著セム、尤謂アルヘシ、(二四〇b)

今の「世尊道」の「一人発真帰源、十方虚空、悉皆消殞」(一人、真を發して源に歸すれば、十方虚空、悉く皆消殞す)は、文の通り。「首楞嚴経の「なかの」道」である。これを天童「古仏」が上堂の時とりあげられたのである。天童「古仏」のおことばに「天童「則」不然」(天童は則ち然らず)とあるから、仏のことばとは違つて、別のことが出てこようとするのかと思われたが、そうではない。仏のことばの理の及ぶところを、このように提示されたのである。「世尊道」の「一人発真帰源、十方虚空、悉皆消殞」のおことばは、「一仏成道觀見法界、草木国土悉皆成仏」(一仏成道して法界を觀見するに、草木国土悉く皆成仏す)ということばに少しも違わないのである。「消殞」とあることばも、「消え殞ちる」などと言えば悪くなったように受け取られる。「悉皆成仏」の姿を「悉皆」消殞すとも言うのである。また「乞兒打破飯碗」(乞兒、飯碗を打破す)とは、「乞兒」とは乞食、ことばで言えないほどのひどいもの。傍居かたとも言う。ほんとうに卑しそうな姿である。その「飯碗」とは、飯を入れる器。それを「打破」してしまったのは、「乞兒にとって」実にますますたよる手段がないように受け取られた。そうではあるが、「乞兒を」嫌うことばではない。結局、「打破飯碗」は解脱の理であろう。この祖師等の一人一人が提示されたことばは、御注釈にないからには、いうまでもなく確定することは難しいとしても、以前とりあげて論議した基準をもって大体考えれば、決して特にとりあげて言うべきこともない。この「乞兒」は卑賤を嫌うべきではない。単に仏祖と言うのに違うはずがない。結局、今、解脱の理を述べられたからには、今更得失取捨におよぶはずがないことは勿論のことである。

「築著碯著」のことばは、これはまた、しかるべき理由がないのではない。「一人発真帰源」の道理が「十方虚空」に「築著碯著」(あちらこちらに突き当る)する

仏性法泰和尚道、十方虚空只是十方虚空ノ  
詞、是又道理必然ナルヘシ、十方虚空ハ只是  
十方虚空ノ理ナルヘシ、  
圓悟詞ニ、十方虚空錦上添花<sup>シ</sup>ト文、悟上得  
悟迷中又迷トモ云シ詞ニ不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>違、錦上ニ添<sup>レ</sup>  
花タラム、実殊勝ナルヘシ、讚嘆ノ詞トモ心  
得ムニ不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>向背<sup>ニ</sup>歟、

大仏道、十方虚空発真帰源、十方虚空ハ只是  
十方虚空ト云程ノ御詞歟、発真帰源ノ道理  
ハ、又発心帰源ナルヘシ、今ノ祖師達ノ(二  
四一a)詞共、面ハカハリ詞ハ違シタルヤウ  
ナレトモ、只一法究尽ノ理ノユク所、又世尊  
道ノ最初ノ発真帰源十方虚空悉皆消殞ノ道理  
ノヒ、ク所カ、如<sup>レ</sup>此無尽ニイハルレトモ、  
只理ノ行所ハ一法ナルヘシ、祖師ノ仏法ト云  
ハ、皆如<sup>レ</sup>此ナルヘキ、今ノ首楞嚴経ヲ偽<sup>キ</sup>  
経ト云説アリ、又不<sup>レ</sup>然トモイフ、偽経ト云  
ニ付テハ、此発真帰源ノ詞多シ、就<sup>テ</sup>之<sup>ヲ</sup>外道  
ハ帰源トイフ、其心地ハ、本ハヨカリシカア  
シク成タリツルヲ、又如<sup>レ</sup>本ヨキ所ヘ帰ト云  
心地ニテ、如<sup>レ</sup>此談ナリ、其心地ニ立<sup>カ</sup>歸<sup>ル</sup>所<sup>ヲ</sup>  
偽経トモ聊<sup>ク</sup>疑<sup>ハ</sup>歟、(二四一b)追可<sup>ニ</sup>一決<sup>ス</sup>  
之

第二段

この句、かつて數位の仏祖、おなじく挙しきたれり。いまよりこの句、まことに仏祖骨髄なり、仏祖眼晴<sup>がんせい</sup>なり。し

のは、いかにも理由がある。

仏性法泰和尚が言う「十方虚空、只是十方虚空」(十方虚空、只だ是れ十方虚空)のことは、これもまた道理は必然であろう。「十方虚空」は「只是十方虚空」の理であろう。

圓悟(克勤和尚)のことに、<sup>(7)</sup>「十方虚空、錦上添花」(十方虚空、錦上に華を添う)とある。「悟上得悟、迷中又迷」<sup>(7)</sup>とも言ったことばに違はずがない。錦上に華を添えた(「ということば」)は、実に特に勝れているだろう。賛嘆のことばと理解しても違わないだろう。

「大仏道、十方虚空、発真帰源」。「十方虚空」は「只是十方虚空」であるというほどのおことばか。「発真帰源」の道理は、また「発真帰源」であろう。今の祖師達のことばは、人は替わり、ことばは違っているようであるけれども、ただ一法究尽の理のゆくところであり、また「世尊道」の最初の「発真帰源、十方虚空、悉皆消殞」の道理の及ぶところが、このように無尽にいわれるけれども、ただ理の行くところは一法であろう。祖師の仏法というのは、皆このようであろう。今の『首楞嚴経』を偽経という説がある。またそうではないともいう。偽経という理由では、この「発真帰源」のことばが多い。これに関して、外道は「帰源」と言うが、その意味あいは、本は良かったが、悪くなってしまったのを、また本のように良い所へ帰るといふ意味あいでこのように説くのである。その意味あいに戻るところを、偽経とほんの少し疑うのか。追ってはっきりとさせよ。

かいふところは、首楞嚴經一部拾軸、あるいはこれを偽経といふ、あるいは偽経にあらずといふ、両説すでに往古よりいまにいたれり。旧訳あり、新訳ありといへども、疑著するところ、神龍年中の訳をうたがふなり。<sup>(9)</sup>しかあれども、いまずでに五祖の演和尚・仏性泰和尚・先師天童古仏、ともにこの句を挙しきたれり。

是ハ右ニ一々所<sub>レ</sub>挙ノ天童已上祖師等詞共ヲ被<sub>レ</sub>指歟、已下如<sub>二</sub>御釈<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>殊子細<sub>一</sub>

これは右に一々とりあげたところの天童「古仏」以前の祖師等のことばを指されたのか。以下はお注釈の通り。特に論じることもない。

第三段

ゆえにこの句、すでに仏祖の法輪に転ぜられたり、仏祖法輪転なり。このゆえに、この句、すでに仏祖を転じ、この句、すでに仏祖をとく。仏祖に転ぜられ、仏祖を転ずるがゆえに、たとひ偽経なりとも、仏祖、もし転挙しきたらば、真箇の仏経・祖経なり、親曾の仏祖法輪なり。

仏祖コソ法輪ヲ転ストハ云ヘキニ、仏祖ヲ転シ仏祖ヲトクト云詞ハ、キト不審ニ聞レトモ、モトヨリ祖門ノ所談ノ姿、仏祖与<sub>二</sub>法輪<sub>一</sub>全非<sub>二</sub>各別<sub>一</sub>、仏祖法輪ヲ転スト云詞アラハ、法輪ニ仏祖被<sub>レ</sub>転ト(二四二a)云義、理トシテアルヘキ、仏説法説仏ノ道理ナルヘシ、已下如<sub>レ</sub>文、

仏祖が法輪を転じると言うべきであるのに、「仏祖を転じ」、「仏祖をとく」ということばは、たしかに疑わしく受け取られるけれども、もとより祖門が説くところの姿は、仏祖と法輪とは決してそれぞれ別ではない。もし仏祖が法輪を転ずるといふことばがあるならば、法輪に仏祖が転ぜられるという意味が、理としてあるはずである。「仏説法・法説仏」の道理であらう。<sup>(11)</sup>以下文の通り。

第四段

たとひ瓦礫なりとも、たとひ黄葉なりにも、たとひ優曇華なりとも、たとひ金襴衣なりとも、仏祖すでに拈来すれば仏法輪なり、仏正法眼藏なり。

是又如<sup>レ</sup>文、世間ノ見ノ方ヨリ云ハ、瓦礫  
与<sup>ニ</sup>優曇花<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>及<sup>ニ</sup>比<sup>一</sup>校論、黑白相違事、  
然而今仏祖ノ調度トナレハ、瓦礫モ黄葉モ更  
優曇花<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>勝劣<sup>ニ</sup>、優曇花金襴衣ヲ  
重宝ト(二四二b)スルハ何故ソ、仏ノ拈シ  
給シユヘ、今モ仏祖ノ調度トナラムトキ、  
全不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>及<sup>ニ</sup>淺深輕重沙汰<sup>一</sup>事、是ヲ<sup>(12)</sup>轉法輪  
トモ、仏正法眼藏トモ可<sup>レ</sup>談、今ハタトヒ偽  
經トモ、仏祖已代々此句ヲ被<sup>ニ</sup>拈挙<sup>一</sup>上ハ、  
於<sup>ニ</sup>此句<sup>一</sup>ハ親會ノ仏祖法ト可<sup>レ</sup>信ナリ、不<sup>レ</sup>  
可<sup>レ</sup>限<sup>カキル</sup>今句許、外道二乗ノ詞ヲ取テモ、大乘  
極談ニ可<sup>レ</sup>用条勿論事、以小乗權門詞直  
指ノ理ヲアラハス、始非<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>驚事<sup>一</sup>ナリ、(二  
四三a)

#### 第五段

しるべし、衆生、もし超出成正覺すれば、仏祖なり、  
生を兄弟<sup>ひんぐい</sup>とせず、仏祖これ兄弟なるがごとく、  
拾軸の文句たとひ偽なりとも、而今の句は超出の句なり、  
句なり、余文・余句に群すべからず。

是又如<sup>ニ</sup>御釈、実衆生超出成正覺スレハ仏祖ト  
ナリ、仏祖ノ皮肉骨髓ナル条、不<sup>レ</sup>及<sup>ニ</sup>子細<sup>一</sup>、  
此定ニ仏祖トナリヌル上ハ、從來ノ兄弟衆生  
ヲ兄弟トセス、仏祖コレ兄弟ナルカユヘニト  
アルヤウニ、今ハ仏句祖句ニ成ヌル上ハ、偽

これもまた文の通り。世間の考えからすれば、「瓦礫」と「優曇華」とは比べ  
て論じるまでもない。黒と白の違いほどのことである。そうではあるが、ここで  
は仏祖の調度となるのであるから、「瓦礫」も「黄葉」も、決して「優曇華」に比  
べて勝劣があるはずがないのである。「優曇華」「金襴衣」を重宝とするのはどう  
してか。仏がとりあげなされたからである。ここでも仏祖の調度となる時、決し  
て淺深・輕重の論議に至るべきではないのである。これらを「仏法輪」とも「仏  
正法眼藏」とも説くべきである。ここでは、「たとひ偽經なりとも、仏祖」がす  
でに代々この句をとりあげられたからには、この句においては、「親會の仏祖法  
〔輪〕」と信じるべきである。今の句だけに限るべきではない。外道二乗のことは  
をとつても、大乘のこの上ない話として用いるべきことは勿論のことである。小  
乗・權門のことで直指の理を表すことは、改めて驚くべきことではないのであ  
る。

これもまたお注釈の通り。実に「衆生、〔もし〕超出成正覺すれば、仏祖」と  
なり、「仏祖の皮肉骨髓」であることは、とりあげて言うまでもない。この通り  
に仏祖となった上は、從來の「兄弟衆生を兄弟とせず、仏祖これ兄弟」であるか  
らとあるように、ここでは「仏句・祖句」となったからには、偽經であるかどう  
かを論じる必要はない。「而今の句は超出の句なり、仏句・祖句なり」と信じよ

經ノ沙汰ニ不<sub>レ</sub>及、而今ノ句ハ超出ノ句ナリ、  
仏句祖句ト可<sub>レ</sub>信トナリ、仍余文余句ニ群  
スヘカラストハアル、(二四三b)

というのである。そこで「余文・余句に群すべからず」とあるのである。

第六段

たとひこの句は超越の句なりとも、一部の文句・性相を仏言祖語に擬すべからず、参学眼睛とすべからず。

御釈ニ聞タリ、コノ句実超越ノ句トモ、サ  
レハトテ一部ノ文句性相ヲ皆仏言祖語ニユル  
シカタキ所ヲ、如<sub>レ</sub>此被<sub>レ</sub>釈、参学眼トスヘ  
カラストアリ、分明、(二四四a)

お注釈で理解した。「この句」は実に「超越の句なりとも」、そうであるからと  
いって、「一部の文句・性相を」みな「仏言祖語」とすることは難しいところを、  
このように注釈されるのである。「参学眼とすべからず」とある。明らかである。

第七段

而今の句を諸句に比論すべからざる道理おほかる、そのなかに、一端を挙拈すべし。いはゆる、転法輪は仏祖儀な  
り、仏祖いまだ不転法輪あらず。その転法輪の様子、あるいは声色を挙拈して声色を打失す、あるいは声色を跳脱  
して転法輪す、あるいはは眼睛を抉出して転法輪す、あるいはは拳頭を举起して転法輪す、あるいは鼻孔をとり、ある  
いは虚空をとるところに、法輪自転なり。

是又分明、所詮転法輪ト云事ハ、如<sub>ニ</sub>前云、  
如来出世シテ為<sub>ニ</sub>衆生濟度ニ四辯八音ヲ以テ法  
ヲ開演シ給フ転法輪ト名ク、今ハ如<sub>ニ</sub>御釈、転  
法輪ハ仏祖儀トアリ、以<sub>ニ</sub>仏祖当体ニ転法輪  
トスヘシ、仏祖イマタ不転法輪アラス、転法  
輪ノ様子トテ一々被<sub>レ</sub>挙、以<sub>ニ</sub>彼等皆転法

これもまた明らかである。結局「転法輪」ということは、前に言うように、如  
来がこの世に出て、衆生濟度のために四弁八音をもつて法を開演されるのを「転  
法輪」と名付ける。ここではお注釈の通り。「転法輪は仏祖儀なり」とある。「仏  
祖」そのものを「転法輪」とすべきである。「仏祖いまだ不転法輪あらず。〔その〕  
転法輪の様子」といって一々提示されるのである。それらをみな「転法輪」とす  
べきである。「声色を挙拈して声色を打失す」とは、声色でない一法がないとこ

輪トスヘシ、声色ヲ拏拏シテ声色ヲ打失ストハ、声色ナラヌ一法ナキ所カ如レ此イハル、又声色ヲ跳脱シテ転法輪スト云ヘハ、声色猶勝タル転法輪アリト聞ユ、非レ爾、声色ノ声色ナル道理カ如レ此イハ(二四四b)ル、仏向上ナムト談セシ程ノ理ナリ、所詮声色眼睛拳頭鼻孔虚空等ヲ以テ転法輪トハ談ナリ、是則法輪自転ノ道理ナルヘシ、ヲホヨソ法輪ト云事ハ、輪王出世ノ時金銀銅鉄ノ四輪アリテ、諸ノ悪物ヲ摧破ス、ユヘニ白地ニモ如レ此悪心ヲ帶物ナシ、今ハ仏出世シ給トキ、諸ノ天魔波旬外道等、法輪ニ被摧破、ユヘニ転法輪トハ云、(二四五a)

#### 第八段

而今の句をとる、いましこれ明星をとり、鼻孔をとり、桃華をとり、虚空をとる、すなはちなり。仏祖をとり、法輪をとる、すなはちなり。この宗旨、あきらかに転法輪なり。

如レ文、如三前段云、此明星ノ姿、鼻孔桃花虚空ノ当体、皆転法輪ナルヘシ、仏祖ヲトリ、法輪ヲトル則トアリ、仏祖ノ姿法輪ナル所ヲ、如レ此被積、

#### 第九段

転法輪といふは、功夫参学して一生不離叢林なり、長連床上に請益辨道するをいふ。

『正法眼蔵闡書抄』口語訳の試み(伊藤)

るがこのように言われるのである。また「声色を跳脱して転法輪す」というと、声色よりもっと勝っている転法輪があると受け取られる。そうではない。声色が声色である道理がこのように言われるのである。仏向上などと説いたほどの理である。結局、「声色」「眼睛」「拳頭」「鼻孔」「虚空」等を「転法輪」と説くのである。これがすなわち「法輪自転」の道理である。一般に「法輪」ということは、輪王がこの世に出た時、金銀銅鉄の四輪があつて、諸々の悪を摧破する。だから、かりそめにもこのような悪い心をもつものはいない。ここでは、仏がこの世にお出になる時、諸々の天魔・波旬・外道等が法輪に摧破される。だから「転法輪」というのである。

文の通り。前段に言うように、この「明星」の姿が「鼻孔」「桃華」「虚空」そのものであり、皆「転法輪」であろう。「仏祖をとり、法輪をとる、すなはちなり」とある。「仏祖」の姿が「法輪」であるところをこのように注釈されるのである。

請益辨道ハ、実問答スレハ転法輪トモ云ヌヘシ、一生不離叢林、長連床上ノ姿ヲ、転法輪ト談スル、実メツラシク驚ニ旧見ニヌヘシ、今ノ草子ハ（二四五b）転法輪草子ナレハ、如此云モ有レ謂、一生不離叢林ノ姿ヲ現成公按トトモ、摩訶般若トトモ、乃至仏性、身心学道、即心是仏是トトモ談スヘキナリ、更不レ可ニ相違、

「請益辨道」は、実に問答すれば「転法輪」とも言えよう。「一生不離叢林」「長連床上」の姿を「転法輪」と説くことは、実に珍しく、以前からの考えと比べて驚くにちがいない。この草子は「転法輪」の草子であるから、このように言うのもわけがある。「一生不離叢林」の姿を「現成公按」であるとも、「摩訶般若」であるとも、乃至「仏性」「身心学道」「即心是仏」であるとも説くべきである。決して相違しないはずである。

正法眼藏転法輪第六十七

爾時寛元二年甲辰二月二十七日、在越宇吉峰精舎ニ示衆。

同三月一日、在同精舎侍者寮ニ書ニ写之。

後以ニ御再治本ニ校勘、書ニ写之ニ畢。

先師天童古仏、上堂拈、○

首楞嚴経ヲ偽経トウタカヒ、コノ宗門ニ引用サル事ハ、ムネト真妄ノ二法ヲ立ルユヘナリ、然而世尊ステニ一人発真帰源十方虚空悉皆消殞ノ道アリ、コレヲ祖師多拈拈拈、先師上堂ニ被レ拈、方可レ用、但用ル時ノ了見ハ、（二四六a）又可レ違ニ彼経大意、然而似タル所アリ、マツ一人ト云人ハ誰人ソ、自欺他欺不審ニ、一人ノ一ノ字ハ不レ対レニ、傍観モナキ心ナルヘシ、コレ尽十方界真実躰ノ人ナルヘ

（第一段）  
先師天童古仏、上堂拈、……」

『首楞嚴経』を偽経と疑い、この宗門で引用されることは、主として真妄の二法を立てるからである。そうではあるが、世尊にはすでに「一人発真帰源、十方虚空、悉皆消殞」（一人、真を発して源に帰すれば、十方虚空、悉く皆消殞す）のことがある。これを祖師は多くとりあげる。先師は上堂でとりあげられた。まさに用いるべきである。ただし用いる時の考えは、また『首楞嚴経』の大意とは違はずである。そうではあるが似ているところがある。先ず、「一人」という「人」は誰か。自分か他人かはつきりしないのである。「一人」の「一」の字は二に對しない。傍らで観ている者もいない意味であろう。「尽十方界真実〔人〕体」の



シ、シカアレハ発真ノ詞モ帰源ノ詞モ不レ中レ用、又十方虚空モ人躰ノ上ニハトキカタシ、悉皆消殞ト云詞モナニトキエヲツヘキソ、ナレハ世間ニ思カコトキアルヘカラス、

天童拈拳ノ詞ニ世尊所説未<sup>タ</sup>免<sup>マスカレ</sup>尽<sup>コトク</sup> 作<sup>ス</sup>奇<sup>ク</sup>特<sup>ク</sup>商<sup>リ</sup>量<sup>ニ</sup>トアル、コノマヌカレスノ御詞ハ、奇特商量ナリト決定スル御詞ナリ、天童ハ不然トアル(二四六b)御詞モ奇特ノ商量、又決定セラル、悉皆消殞トアル詞ヲ不然ト被<sup>ニ</sup>引<sup>レ</sup>替<sup>ハ</sup>タルニテコソアレ、乞兒打破飯碗トアル許、一人トアルヲ今ハ乞兒トイヒ、帰源トアルヲ打破ト、ル、更不<sup>ニ</sup>相<sup>レ</sup>違<sup>フ</sup>、<sup>乞兒</sup>ヘシ、<sup>一人ト心得</sup>非<sup>レ</sup>別<sup>レ</sup>人<sup>ト</sup>、

法演和尚ノ十方虚空築著<sup>ト</sup>アルモ、悉皆消殞ノ同詞ナリ、

法泰和尚ノ十方虚空只是十方虚空トアル、サハヤカニキコエタリ、悉皆消殞ノ詞コレ、  
圓悟禪師ノ錦上<sup>ニ</sup>添<sup>フ</sup>花<sup>ト</sup>アルモ、上ノ十方虚空(二四七a)空只是十方虚空トアル同詞ナルヘシ、先師ノ発真帰源スレハ十方虚空発真帰源ストアルモ、更カハラ又悉皆消殞ナルヘシ、

一仏成仏觀見法界、草木国土悉皆成仏トイフ詞ト、今ノ悉皆消殞ノ詞又不<sup>レ</sup>違<sup>フ</sup>、消殞ハ脱

「人」であろう。そう(真人)であるから、「発真」のことばも、「帰源」のことばも、使いものにならない。また「十方虚空」も「人体」の上では説くことは難しい。「悉皆消殞」ということばも、どのように消え殞ちるだろうか。それだから、世間で思うよう[な「首楞嚴經」の意味]であるはずがない。

天童拈拳のことばに「世尊所説、未免尽作奇特商量」(世尊の所説なり、未だ免れず、尽く奇特の商量を作すことを)とある。この「免れず」のおことばは、「世尊の諸説が」「奇特商量」であると決定するおことばである。「天童は「則ち」然らず」「天童則不然」とあるおことばも「奇特の商量」であり、また決定されるのである。「悉皆消殞」とあることばを「不然」と「言つて」引き替えられたのである。「乞兒打破飯碗」(乞兒、飯碗を打破す)とあるだけである。「一人」とあるのを、ここでは「乞兒」と言い、「帰源」とあるのを「打破」とするのである。「世尊の所説と」決して相違しない。「乞兒」をただ「一人」と理解すべきである。別の人ではない。法演和尚の「ことばに」「十方虚空、築著<sup>ト</sup>アルモ、」とあるのも、「悉皆消殞」の「ことばと」同じことばである。

法泰和尚の「ことばに」「十方虚空、只是十方虚空」(十方虚空、只だ是れ十方虚空)とあるのが、明解に受け取られた。「悉皆消殞」のことばがこれである。

圓悟禪師の「ことばに」「錦上添華」とあるのも、前の「法泰和尚の」「十方虚空、只是十方虚空」とあるのと同じことばであろう。先師の「発真帰源、十方虚空、発真帰源」(真を發して源に帰すれば、十方虚空、発真帰源す)とあるのも、決してかわらない「悉皆消殞」であろう。

一仏成道觀見法界、草木国土悉皆成仏<sup>(5)</sup> (一仏成道して法界を觀見するに、草木国土悉く皆成仏す)ということばと、ここの「悉皆消殞」のことばは、また違わな

落ノ詞、虚空ヲステムトニアラス、一人トイフ、各々ノ衆生ノ中ノ一人トサスニハアラス、尽十方界真人躰ナリ、一人トイフカ世間ノ心地ナラハ迷妄ノ詞、発真帰源ノ詞不<sub>ニ</sub>相<sub>ニ</sub>應<sub>ス</sub>、発ト云字モ、帰ストイフ字モ、トモニ非<sub>ニ</sub>(二四七b)世間詞、真<sub>ニ</sub>ハ不<sub>レ</sub>對<sub>レ</sub>妄<sub>ニ</sub>、<sup>ミナモト</sup>帰ノ字モ源<sub>ニ</sub>、<sup>キ</sup>二<sub>ニ</sub>歸ストイハ、流<sub>ニ</sub>轉ノ心地、更不<sub>レ</sub>對<sub>レ</sub>緣源ト心得ヘシ、

教ニ諸法実相ト、クモ、三界唯一心ト、クモ、諸法ノアシキ物ヲ実相ノ甘露ト心得ナシ、我等力心ヲ取テ三界ト云フナムト談スルマテハ、善悪ニカ、ハルニ似タリ、麻三斤ソ、庭前栢樹子ソナムト、クコソ、今ノ祖門相伝ノ義ナレトテ、何トモ不<sub>レ</sub>被<sub>ニ</sub>心得<sub>ニ</sub>ヲ祖門ノ詞トイフ、可<sub>レ</sub>笑、是ハ所詮<sub>ニ</sub>コノ子細<sub>ニ</sub>ニクラキ故、イマア(二四八a)クル所ノ祖師ノ詞トモニテ習ヘシ、或スヘテ法文ノ義ヲ談スル事不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有、タ、公按ヲ額ニ懸テコソアレトヲシフルコト、当時天下ニアマネシ、額ニカクヘクハ、マツ世尊道ノ発真帰源十方虚空悉皆消殞トアルコノ詞ヲカクヘシ、但コノ詞ハ不<sub>レ</sub>審ナルヘカラス、流<sub>ニ</sub>轉還滅スルヲ、或從知識シ或從經卷シテ、<sup>8</sup>發心帰源スト心得テヤミヌヘシ、額ニカクル詮アルヘカラス、イマ乞兒打破飯碗トモ、築著磕著トモ、只是十方

い。「清殞」は脱落のことばである。虚空をすてようというのではない。「一人」というのは、各々が衆生の中の一人と指すのではない。「尽十方界真人體」である。「一人」ということが世間の意味あいであるならば、迷妄のことばである。「発真帰源」のことばは相応しくない。「発」という字も、「帰」という字も、ともに世間のことばではないのである。「真」は妄に對しない。「帰」の字も「源」に「帰」というならば、流轉の意味あいである。決して「他の」縁に對しない「源」であると理解すべきである。

「教に「諸法実相」と説くのも、「三界唯心」と説くのも、「諸法」という悪い物を「実相」という甘露と理解し、我々の「心」を取って「三界」というなどと説く限りは、善悪にかかわっているように見える。「麻三斤」「庭前の栢樹子」などと説くのが、今の祖門相伝の道理であるといつて、どうしても理解できないのを祖門のことばであると言う。笑うべきである。これは結局、このこまかなわけを知らないからである。ここであげるところの祖師のことばによって学ぶべきである。或いは、全く法文の意味を説こうとはせず、ただ公按を額<sup>ひたい</sup>に懸けておれと教えることが、今日天下に行き渡っている。額<sup>14</sup>に懸けるべきは、まず世尊のことばの「発真帰源、十方虚空、悉皆消殞」とあることばを懸けるべきである。もつともこのことばはよく分らないはずがない。流轉還滅するのを、或從知識、或從經卷して「発真帰源」とすると理解して決着できよう。額に懸ける道理があるはずがない。いま「乞兒打破飯碗」とも、「築著磕著」とも、「只是十方虚空」とも、「錦上添華」とも、「発真帰源」すれば「発真帰源」ともいうことが、教に相違したことばであるから、額にも懸けるべきである。何度も知識(正しい指導者)のことばにあって、もっと理解しようとすることを、額に懸けて年数を送るべきであ

虚空トモ、錦上添花トモ、発真帰源スレハ発  
真帰(二四八b)源トモイフコトコソ、教ニ  
違シタル詞ナレハ、額ニモカクヘケレ、イク  
タヒモ知識ノ詞ニアフテ、ナヲコ、ロエム事  
ヲコソ、額ニ懸テ年序ヲ送ヘケレ、スヘテ詞  
ヲモテヲシフヘカラス、以文字カキ了フヘ  
カラストキラフ事ハ、今ノ祖師ノ重ノ御  
詞ニハタカフヘキヲヤ、悉皆消殞トイフ御詞  
ヲイツカハナニトモ心得マシキト事トテウチ  
スツル、此等ヲ以テ可<sup>ヘシ</sup>勘<sup>カム</sup>実<sup>カウ</sup>否、世尊道ヲ開  
悟スル各々面々如<sup>レ</sup>此心得マシキ事ナリ、言  
句ニカハハラム非<sup>ニ</sup>仏法トハ返々不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>云  
々、コノアクル所ノ(二四九a)祖師皆古仏  
トイハレ角<sup>カク</sup>立<sup>ツ</sup>トホメラル、今ノ世間ニ長老  
トイハル、輩ト、已前ニアクル祖師ト天地玄  
隔々、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>及<sup>ニ</sup>同日論<sup>ニ</sup>、コノ面々ノ詞似<sup>ニ</sup>  
相違<sup>レ</sup>トモ、一言モ不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>替、仏説法々説仏  
程ノ儀々、

転法輪ト云事、先ニ事旧ヌ、転<sup>オム</sup>惑<sup>ツク</sup>摧<sup>サイ</sup>破<sup>ハ</sup>ノ義  
々、転ハ惑ヲ転スル々、惑ト云ハ凡悩々、転  
ハ法輪々、

輪王ハ一州ヲ領スルアリ、二州三州及四州ヲ  
領スルアリ、金銀銅鉄ノ四ニタトフ、ヤカテ  
輪モ金銀銅鉄々、輪王出世ハ果報最上ナル  
(二四九b)ユヘニ、輪モ具足、優曇花モ開ク

る。決してことばで教えるな、文章で書いて述べるべきではないと斥けることは、  
今の祖師の重ね重ねのおことばには違はずであるのになあ。「悉皆消殞」という  
おことばをいつのまにか全く理解できないことといって打ち捨てる。これらによ  
って真実かどうかを考えるべきである。「世尊道」を開悟する各々の面々は、この  
ように理解してはならないのである。言句にかかわるのは仏法ではないとは、決  
して言ってはならないのである。このあげるところの祖師は、皆古仏といわれ、  
他に抜きんできているとほめられる。今の世間で長老といわれる輩と、以前にあげ  
る祖師とは天と地ほどの隔たりである。同様に見なし扱うべきではないのであ  
る。この各人のことばは、相違しているようであるけれども、一言も替えるべき  
ではない。「仏説法・法説仏」<sup>(11)</sup>ほどのことば「同じことを説いているので」ある。

第三段  
「転法輪」ということは前に言い古された。「転惑摧破」の意味である。「転」  
は「惑」を転じるのである。「惑」というのは煩惱である。「転」は「法輪」であ  
る。

「輪王は「南瞻部洲の」一洲を領めることもあり、「東南の」二州、「東西南の」  
三州及び四州を領めることもある。「領める洲の多い順に」金銀銅鉄の四つにたと  
える。まさに輪も金銀銅鉄である。輪王の出世は果報の最上であるから、輪も具

トイフ、七宝ユタカナリ、千子アリトイフ、何モ世間ノ報ノナカニハ最上ナレトモ、輪カスクレタルニツキテ輪王トハ称スルナリ、

コノ句ステニ仏祖ノ法輪ニ転セラレタリ、○真箇ノ仏経祖経トイフ、是如レ文、地ニタフルル物ハ地ニヨリテラクナムト云経文ノ詞ニテモ、仏法ハアキラム、牆壁瓦礫ニテモ仏心ハアラハス、一茎草ニテモ丈六金身ヲアキラム、マシテ偽経トモ仏祖ノ拈拈ノ上ハ正法ナルヘシ、依(二五〇a)経解義三世仏怨、離経一字如同魔説ナムトイフ、真経偽経トハワカス、了見ノ人ニヨルカ、正人邪法ヲ行スルハ、邪法カヘリテ帰正トイフコトアリ、今ノ義ニヲトロクヘカラス、発真帰源ノ詞ステニ仏経ト、但経ト、親會ノ法輪ト、

タトヒ瓦礫トモ、タトヒ黄葉トモ、○仏正法眼蔵ナルヘシトイフ、瓦礫黄葉ノ具足ニハ優曇花モ難<sup>カタシ</sup>用、仏拈シテ仏法ヲ附属シヲハシマスユヘニ、金欄衣又袈裟ト、仏衣ナリ、旁不審ト、但右ニイフカ如ク、瓦礫モ仏心ト、黄葉モ丈(二五〇b)六躰ト、又優曇花モタハ輪王ノ法ニテアラムハカリハ無<sup>レ</sup>詮ケレトモ、仏拈シヲハシマセハ仏法ト、金欄衣ナリトモ俗眼モシハ世間ノ財宝ナラムマテハ仏法ニ難<sup>レ</sup>取、袈裟ニツクリヌレハ仏衣ト、コノコ

わつており、優曇華も開くという。七種の宝が豊かであり、千人の子がいるという。どれも世間の報の中で最上であるけれども、輪がすぐれている理由によって輪王と称するのである。

「この句、すでに仏祖の法輪に転ぜられたり、……真箇の仏経・祖経なり」という。これは文の通り。「地に倒るる者は地によりて起<sup>(15)</sup>く」などという経文のことばでも仏法は明らかになる。牆壁瓦礫でも仏心はあらわす<sup>(16)</sup>。一茎草でも丈六の金身を明らかにする<sup>(17)</sup>。まして「偽経なりとも、仏祖」が拈拈したからには、正法である。依経解義、三世仏怨、離経一字、如同魔説<sup>(18)</sup>（経に依って義を解するは三世仏の怨、経の一字を離れては魔説に如同す）などという。真経・偽経と分けない。考え判断する人によるか。正人が邪法を行じるのは、邪法が反対に正に帰すということがある。今のことに驚くべきではない。「発真帰源」のことばは既に「仏経」であり、「祖経」であり、「親會の「仏祖」法輪」である。

〈第四段〉

「たとひ瓦礫なりとも、たとひ黄葉なりとも、……仏正法眼蔵」であろうとある。「瓦礫」「黄葉」が具わっているときには、「優曇華」も用いることは難しい。仏が「それらを」拈じて仏法を附屬なさいますから、「金欄衣」がまた袈裟であり、仏衣である。いずれにしてもよくわからないのである。ただし、右にいうように、「瓦礫」も仏心である。「黄葉」も一丈六尺の「仏」体である。また、「優曇華」もただ輪王の法であるというだけではしかたがないが、仏が拈じなされば仏法である。「金欄衣」であっても、俗眼「で見たり」、もしくは世間の財宝である限りは、「それを」仏法とすることは難しい。袈裟に作ってしまうと仏衣である。

トハリヲ云々、所詮仏祖ノ詞ヲセメテタトフルユヘニ、瓦礫トモトイフ詞モイテクルナリ、取トキハ瓦礫黄葉モトリ、スツルトキハ優曇花金襴衣モスツヘシ、善悪ノ法ヲ相對スルトハ思ヘカラス、

從來ノ兄弟衆生ヲ兄弟トセス、○今ノ句ハ超出ノ句トイフ、是ハ衆生正覺ヲ成スレハ仏(二五一a)祖々、○但又サレハトテ、一部ノ文句ヲハ仏言祖語ニ擬スヘカラストナリ、一代ノ諸教皆是對機隨情ノ説ナレハ不可取、拈優曇花コソ法文ナレナムトイフ篇ニ入ハ、教ニモクラク拈花ノ子細ニモクラキ故々、發真ト云ハ仏道々、發真ニアラサラムハ妄法妄語々、真トイヒカタシ、

帰源ト云ハサトリニ帰ルトイフ程ノ事ナリ、本覺ニ帰スナムト云カ如ク、一人發真帰源ノ下ニハ是什麼物恁麼来トモツケ、説似一物即不中(二五一b)トモツケ、修証ハナキニアラス染汚スルコト得シトモイヘ、スヘテ祖師ノ言句、イツレヲツケテミルトモ、其儀フタツトナルヘカラス、三界唯一心々外無別法ノ詞、悉皆消殞、乞児打破飯椀、築著碯著、只是十方虚空、錦上添花等詞、皆發真帰源ナルナリ、ヨノノ参学スヘシ、有無善悪ノ詞トノミキラヒテ、タ、イタツラニ両辺ノクチヒ

この道理をいうのである。結局、仏祖のことは無理にたとえるから「瓦礫なりとも」ということばも出てくるのである。取る時は「瓦礫」「黄葉」も取り、捨てる時は「優曇華」「金襴衣」も捨てるべきである。善悪の法を、相對するとは思ってはならない。

〔第五段〕

「從來の兄弟衆生を兄弟とせず、……〔而〕今の句は超出の句なり」とある。これは、「衆生〔もし超出〕成正覺すれば、仏祖なり、……」。ただまたそうだからと言って、「一部の文句」を「仏言祖語に擬すべからず」とある。「仏」一代の諸教は皆對機隨情(相手の素質・能力にしたがって)の説であるから、取つてはならない。「靈鷲山での」拈優曇華こそ法文であるなどという根拠に「これを」入れるのは、教にも暗く、拈華のいわれにも暗いからである。

「發真」というのは仏道である。「發真」でないのは妄法妄語である。真と言い難い。

「帰源」というのは、さとりに帰るといふほどのことである。本覺に帰るなどというように、「一人發真帰源」の下には「是什麼物恁麼来」とも付け、「説似一物即不中」とも付け、「修証はなきにあらざ、染汚することは得じ」とも言え。すべて祖師の言句〔であって〕、いずれを付けてみるとしても、その意味が二つとなるはずがない。「三界唯一心、心外無別法」のことは、「悉皆消殞」「乞児打破飯椀」「築著碯著」「只是十方虚空」「錦上添華」等のことば、「これらは」皆「發真帰源」であるのである。よくよく参学すべきである。有無・善悪のことはとのみ嫌って、ただわけもなく両辺の唇を合わせた声の響きと想うことは、衆生が顛倒しているところの惑いである。これを眞実と理解してはならない。

ルヲアハセタル声ノヒ、キトヲモフ事ハ、衆  
生顛倒ノマトヒニテコソアレ、是ヲ実ト解ス  
ル事ナカレ、(二五二a)

(1) 『如浄語録』(天童景德寺語録)。

上堂。挙。世尊道、一人発<sub>レ</sub>真帰<sub>レ</sub>源、十方虚空悉皆消殞。師拈云。既是世尊所説、未免尽作<sub>レ</sub>奇特商量。天童則不然。一人発<sub>レ</sub>真  
帰<sub>レ</sub>源、乞兒打<sub>レ</sub>破飯碗。(鏡島元隆『天童如浄禅師の研究』、春秋社、一九八三年八月、三〇三〜三〇四頁)

(2) 『嘉泰普燈錄』卷二六、大瀧仏性泰禅師七則。

当知虚空生<sub>レ</sub>汝心内、猶如<sub>レ</sub>片雲点太清裏、況諸世界在<sub>レ</sub>虚空耶。汝等一人発<sub>レ</sub>真帰<sub>レ</sub>元、十方空悉皆消殞。(正蔵一九・一四七b)

鏡島元隆監修・曹洞宗宗学研究所編『道元引用語録の研究』(春秋社、一九九五年三月)は五祖法演の語を『法演禅師語録』卷上(正蔵四七・六五〇a)大慧『正法眼蔵』卷一(統蔵一一八・一一c)からの引用とし(二五七頁)、仏性法泰の語は右にあげた『嘉泰普燈錄』の箇所とする(四九八頁)。だが、『嘉泰普燈錄』によって仏性法泰の語を引きながら、そこに五祖法演の語があるのに、改めて『法演禅師語録』や大慧『正法眼蔵』を引くであろうか。これらによれば『首楞嚴経』のことばとしてではなく、「古人道」「古道」とあり、「若有一人発<sub>レ</sub>真帰<sub>レ</sub>源……」とあって、「若有」の二字がある。法演の語の方にも同じくこの二字が頭にある。このことから、五祖法演の語も『嘉泰普燈錄』からの引用と見たほうがよいのではないであろうか。また、注(3)でも指摘するように、『圓悟仏果禅師語録』においても法演の語は引かれる。

(3) 『圓悟仏果禅師語録』卷八。

釈迦老子道、若有<sub>レ</sub>二人<sub>レ</sub>発<sub>レ</sub>真帰<sub>レ</sub>源、十方虚空悉皆消殞。五祖和尚又云、一人発<sub>レ</sub>真帰<sub>レ</sub>源、十方虚空築著<sub>レ</sub>磕著。山僧即不然。若  
有<sub>レ</sub>二人<sub>レ</sub>発<sub>レ</sub>真帰<sub>レ</sub>源、十方虚空錦上鋪<sub>レ</sub>華。(正蔵四七・七四八a)

ここでも五祖法演の語が引かれる。圓悟克勤の語は、頭に「若有」とあり、最後が「錦上添華」ではなく「錦上鋪華」となってい  
る。

(4) 『永平広録』卷二(大仏寺語録)。

上堂。云。世尊道、一人発<sub>レ</sub>真帰<sub>レ</sub>源、十方虚空悉皆消殞。五祖山法演和尚道、一人発<sub>レ</sub>真帰<sub>レ</sub>源、十方虚空築著碁著。夾山圓悟禪師道、一人発<sub>レ</sub>真帰<sub>レ</sub>源、十方虚空錦上添<sub>レ</sub>華。仏性法泰和尚道、一人発<sub>レ</sub>真帰<sub>レ</sub>源、十方虚空只是十方虚空。先師天童道、一人発<sub>レ</sub>真帰<sub>レ</sub>源、十方虚空悉皆消殞。既是世尊所<sub>レ</sub>説、未<sub>レ</sub>免<sub>三</sub>尽作<sub>二</sub>奇特商量<sub>一</sub>。天童則不<sub>レ</sub>然。一人発<sub>レ</sub>真帰<sub>レ</sub>源、乞兒打<sub>レ</sub>破飯碗。師云、前来五位尊宿道是恁麼、永平有<sub>レ</sub>道与<sub>レ</sub>前不<sub>レ</sub>同、一人発<sub>レ</sub>真帰<sub>レ</sub>源、十方虚空発<sub>レ</sub>真帰<sub>レ</sub>源。(『全集』三・一一八頁)

この上堂では、道元禪師は「永平」と称しているが、二つ前に「改大仏寺称永平寺上堂(寛元四年丙午六月十五日)」があるから、大仏寺を永平寺と改称してからの上堂である。『転法輪』とこの上堂で引く五仏祖とその語句は全く同じであり、道元禪師の語句も両者の間には二年ほどの隔たりがあるが同じである。

ところで、『転法輪』では「大仏」と自称しているが、奥書から分かるように「寛元二年二月二十七日」に「吉峯寺」にての示衆である。大仏寺の開堂は七月十八日であるが、「大仏」と称しているのは、最初「吉峯」とでもあったものを、再治の際に「大仏」と改めたのであろうか。奥書によれば、寛元二年三月一日に書写したものを、後に再治本によって校勘、書写しているのである。あるいは、既に「大仏」と称していたのかも知れない。

(5) 「草木国土悉皆成仏」について、『天台本覚論』(岩波書店、一九七三年一月)の補注では、「たとえば謡曲の『墨染桜』などでは「中陰経の妙文」と称して引用しているが、現存の中陰経には見られず、おそらく、そこである中陰経とは、日本での偽作と考えられる。早くは法地房証真の止観私記(一一〇七完成)第一本に「中陰経に云く、一仏成道、観見法界、草木国土、悉皆成仏」(日仏全三二、七九九頁上)と引用されている」と述べている(四五八〜四五九頁)。同書所収の『漢光類聚』卷一に「一に観見の草木成仏とは、経に云く、「一仏成道観見〇悉皆成仏」と云へり」と省略した形ではあるが引用しており、その頭注には、この文は「道邃の摩訶止観論伝弘纂義に典を出さずに用いているのが最も早いと思われる」(一一六頁)とする。

(6) 「徳失」は「得失」の誤りであろう。

(7) 『正法眼蔵現成公案』。

迷を大悟するは諸仏なり、悟に大迷なるは衆生なり。さらに悟上に得悟する漢あり、迷中又迷の漢あり。(『全集』一・二頁)

(8) 「発心」は「発真」の誤りであろう。訳では改めた。

(9) 旧訳『仏説首楞嚴三昧経』二卷、後秦、鳩摩羅什訳(正蔵一五・六二九b〜六四五b)

新訳『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴経』十卷、唐、般刺蜜帝訳(正蔵一九・一〇六b〜一五三b)

(10) 「神龍年中」は唐代である。西紀七〇五〜七〇七年。「神龍年中」の訳をうたがふとは、新訳を偽経ではないかと疑うのである。

道元禪師は、以前より『首楞嚴経』『円覚経』は偽経ではないかと思っており、それを如浄に確かめた問答が、『宝慶記』に収められ

『正法眼蔵聞書抄』口語訳の試み(伊藤)

ている。

拜問。首楞嚴經・円覺經、在家男女読レ之以為、西來祖道。道元、披閱兩經、而推尋文之起尽、不レ同ニ自余之大乘諸經、未レ審ニ其意。雖有劣諸經之言句、全無勝於諸經之義勢耶。頗有同ニ六師等之見。畢竟如何決定。

和尚示曰。楞嚴經自昔有疑者也、謂、此經後人構敷。先代祖師、未ニ曾見レ経也。近代癡暗之輩、読レ之愛レ之。円覺經亦然。文相起尽頗似也。(『全集』七・一二頁)

- (11) 拙稿『御抄』の『正法眼蔵』解釈―打返の表現について―(『駒沢大学仏教学部研究紀要』第三六号、一九七八年三月) 二一九頁 参照。

- (12) 「転法輪」とあるが、本文によれば「仏法輪」であろう。訳文では改めた。

- (13) 仏が具えている四種の自由自在で障りのない理解表現能力と、仏の声に具わっている八種の勝れた特質。四弁(四無礙弁)とは、法無礙弁、義無礙弁、辞無礙弁、樂無礙弁、八音とは、極好音、柔軟音、和適音、尊慧音、不女音、不誤音、深遠音、不竭音である。

- (14) 拙稿「公案と只管打坐」(『宗学研究』第二二号、一九八〇年三月)、『正法眼蔵抄』に見られる「近代の禅僧」批判(『印度学仏教学研究』第二九卷第一号、一九八〇年十二月) 参照。

- (15) 経文ではなく、『入大乘論』巻上の語句である。

如ニ人因レ地故倒レ、還依レ地而起。(正蔵三二・三六b)

- (16) 『宗門統要集』巻九 百丈懷海章。

師因洞山問、如何是古仏心。師云、牆壁瓦礫。(一五b)

- (17) 『仏果圓悟禪師碧巖録』巻一 第八則。

有時將ニ一莖草、作ニ丈六金身用、有時將ニ丈六金身、作ニ一莖草用。(正蔵四八・一四八a)

- (18) 『景德伝燈録』巻六 百丈懷海章。

問、依レ経解レ義三世仏怨、離レ経一字如ニ同魔説如何。師云、固守ニ動用ニ三世仏怨、此外別求即同ニ魔説。(正蔵五一・二五〇a)

(一九九六・六・二五)